5万トン時代へ

青森リンゴ輸出 1

孫文支援 本県との縁に

台湾親交の礎・山田兄弟

弘前市新寺町に貞昌寺という浄土宗のお寺がある。弘前藩初代藩主・津軽為信公が生母を弔うため建立したという由緒ある寺で、地元出身の作家石坂洋次郎の墓もある。

境内で、ひときわ目を引くのが2基の立派な石碑。弘前生まれの山田良政（1868～1900）、純三郎（1876～1960）兄弟の功績をたたえたものだ。

良政の碑には「中国革命の父」あるいは中国、台湾で「国父」と尊敬される孫文が筆を執った追悼文が、純三郎の碑には初代中華民国総統の蒋介石が贈ったとされる「永懐風義」（立派な行いを永く思う）という碑銘が刻まれている。

本県出身で台湾の成立に大きく関わったこの2人が、実は青森リンゴの大口輸出先である台湾との結び付きの礎、立役者なのではないかと、ひそかに思っている。

良政は日清戦争に陸軍通訳官として出征、孫文の革命運動を支援し、清朝打倒を掲げた辛亥革命に身を投じ戦死。中国革命で初の日本人犠牲者となった。

一方、純三郎は、兄の遺志を継いで孫文を支える役割を担った。孫文の側近として信頼を集める中で蒋介石とも親交を結び、孫文が死去した際には日本人で唯一死に水を取ったといわれる。

昭和40年代末以降に台湾がリンゴ輸入枠を設定した時期、本県だけが輸入を認められた。また、日本に駐在する台湾政府の代表は、異動があると必ず貞昌寺にある山田兄弟の碑を拝礼に訪れる。確かな裏付けがあるわけではないが、台湾側にとって、本県や弘前が特別な存在だということが感じられる。

台湾向けリンゴ輸出で、多くの業界関係者の努力があったことは言うまでもない。だとしても、本県と台湾の縁（えにし）の根底にある山田兄弟の存在を忘れることはできない。

（県りんご輸出協会事務局長　深澤守）

◆　◆

本県産が9割以上を占める国産リンゴの輸出が2014年産で初めて3万トンを超え、15年産では一層の増加が期待されている。深澤守・県りんご輸出協会事務局長が本県のリンゴ輸出の歩みを解説し、5万トン突破に産地として何が必要かを探る。

※この連載は毎週火曜日に掲載します。

貞昌寺（弘前市）にある山田兄弟の石碑を拝礼に訪れた台湾政府関係者ら＝2014年3月

〈ふかさわ・まもる　1952年、山梨県出身。弘前大学農学部園芸学科卒。74年県庁入り。りんご果樹課長、県中南地域県民局長などを務め、2012年から現職〉